

Ambraser Handschrift における ne の脱落

岡 崎 忠 弘

Der Nibelunge Not の写本は全部で37種あるのに対し、Kudrunの写本は Hans Riedの手に成る Ambraser Handschrift の中に収められている僅か1種のみである。この写本は皇帝マキシミリアン一世の命を受けて H. Ried が 13C. から 14C. への変わり目頃に成立したと推測される〈Heldenbuch an der Etsch〉に拠って、1504—1515年に筆写したとされているが、その成立については疑問視する学者もある。

さて、Ambraser Handschrift の H. Ried 版 Kudrun における否定詞 ne の取り扱い方と K. Bartsch 版 Kudrun におけるそれとの比較を通して、H. Ried が拠ったとされている〈Heldenbuch an der Etsch〉からの筆写の際、彼はある一定の基準のもとに ne の取捨を行ったかどうか、の問題を見てみたい。というのは、Bartsch 版 Kudrun の ne の実に約63%が校訂の段階で補足されたものであって、Ried 版には本来存在しなかった ne であるのだから。

H. Ried が筆写をなした時期には既に単独の ne は消滅融合を終えてしまっている。この16C. 初頭の語法に照らして否定詞 ne の取捨がなされたのではなかろうか、つまり併用型否定文の ne や pleonastisch な ne は捨てられ、もし欠落すれば肯定文への転化につながる ne のみを Hans Ried は残したのではなかろうか、という推測が先ず考えられよう。そこで具体的に統計を取ってみると：

	Ambraser Hds. に本来存在する ne	Bartsch 版で補 足されている ne	Bartsch 版に見 られる ne の総数
ne — niht	8 例	21 例	29 例
niht — en	20	14	34
ne — niemen	2	2	4
ne — nie	0	1	1
ne — nimmer	1	3	4
ne 単 独	22	50	72

1. ne—niht(niemen, nie, nimmer)型及び niht—en 型の併用型否定文においては、仮に ne が脱落しても肯定文になる危険はない。Ried 版ではなるほど 71%の高率で ne の脱落が見られる。

2. ne 単独方法においては実に 70%弱の ne が脱落している。しかし、ne の脱落は直ちに肯定文への転化につながるものではない。Mhd. の単独の ne の用法に従って全用例 72 例を分類して表示すると：

	Ambraser Hds. に本来存在する ne	Bartsch 版で 補足されている ne	Bartsch 版に 見られる ne の 総数
イ. wizzen	14 例	8 例	22 例
ロ. ruochen	3	0	3
ハ. en—mag	1	0	1
ニ. en—liez	0	1	1
ホ. wenn nicht の意	3	19	22
ヘ. daß nicht の意	0	6	6
ト. pleonastisch な ne	1	16	17

チ。

(i) なるほど先に予想した通り、pleonastisch な ne は極めて高い率で省略されている。

(ii) ところが、たとえばイの wizzen を否定する単独の ne が脱落すればその文は肯定文になってしまうのに、8 例も ne の脱落の用例が見られる。ここに至って、無用の ne のみが脱落するのではないという推測は崩れる。上表のイ～へまでの ne は必要欠くべからざる単独の ne である。然るに、約 62%の高率で脱落している(但し、上表ホの ne の補足された 19 例のうち、5 例のみは除外を示す danne を含んでいる。しかし、残りの 14 例は danne もないのに、ne は脱落している。

さて、Hans Ried は Ambraser Handschrift の中で Nib.をも筆写している。写本 d がそれである。Michael S. Batts: Das Nibelungenlied, Paralleldruck der Handschriften, A, B und C nebst Lesarten der übrigen Handschriften, Max Niemeyer Verlag, Tübingen, 1971 に拠って、写本 d (=Ried 版)における ne の状況を調べ、Bartsch 版 Nib.との異同を調査してみると、写本 d. では実に 68.5%の ne が脱落している。Kudrun の場合と同じように、併用型否定文における ne の脱落(68%)と pleonastisch な ne の脱落(73%)が高率

となっているが、また Kudrun の場合と同じように、なくてはならぬ単独用法の ne が70%の割合で写本dでは落ちている。

以上の大まかな調査によって、Hans Ried は〈Heldenbuch an der Etsch〉を筆写する際、当時の語法にも依らず、また原本批判も敢えてなさず、即ち彼なりの取捨の基準規範を持ってなかったのではなからうかと推測される。今後実証性の高い調査を進めてみたいと思う。

(完)